金光教の声

平成24年1月～3月放送分

NO.398

【もくじ】

《年頭放送》
神人あいよかけよの道・・・・・・・・・1
何でも結構・・・・・・・・・・・・5
伯母のお供え物・・・・・・・・・・9
突然の病・・・・・・・・・・・・・13
見つかってよかった・・・・・・・・17
摂食障害を乗り越えて・・・・・・・21
ありがとうを頂いた・・・・・・・・25
4年に1度の記念日・・・・・・・・29
元気をもらった
　気仙沼でのボランティア・・・・・33
大地震大津波に出遇って・・・・・・37
ぼくの町だ・・・・・・・・・・・・41
お寿司を食べに行った話・・・・・・45
ビバ！　大阪人・・・・・・・・・・49

年頭放送

「神人（かみひと）あいよかけよの道」

金光教教務総長　佐藤光俊

皆様、新年明けましておめでとうございます。それぞれに、改まったお心で新年をお迎えになったことと存じます。

金光教では基本方針を、「世界・人類の助かりに向けて、金光大神の信心を求め現す」と定めて、もろもろの教団活動を進めておりますが、私も、新たな年を迎え、なお一層、世界の平和と人類の助かりのお役に立つ生き方を心掛けて、今年一年を送ってまいりたいと願っております。

金光教の教祖、金光大神様は、神様と人間があいよかけよで立ち行く道を、生涯懸けて説き続けました。「あいよかけよ」とは、岡山県の古い方言で、この言葉によって、遠い昔から遙かな未来へ向かって営まれる悠久の天地の働きと、今を生きる人間との関わり合いを、「あいよかけよ」と言い表しました。

ところで、私はある朝、本部広前にお参りした帰りに、明るく輝く明けの明星を見ました。続いて、空一面を東西南北と眺め回すと、満天の星空。しばらく見とれていましたが、ふと気付くと、お星様から私が見られている、いや、見守られているんだという、えも言われぬ不思議な思いが湧いてきたのです。

天地全体をご神体とされる天地金乃神様は、人間を始め万物が生きて行く上で根源的な働きをして下さる神様であり、どのような人間も、天地金乃神様のお恵みとお働きの中に生かされています。そして、金光大神様は、「天は父、地は母」とも教えられていますが、これこそ、見守られているという捉え方だと、その時、直感したのです。この道理を知り、神様の恵みと働きを有り難く受けることによって、人間の生き方は、尊い生き方となる、と思われます。同時に神様も、そうした尊い生き方に目覚めた人間によって、神の働きを十分に現すことが出来るのであります。

このような神様と人間の関わり合いは、時に親子の関係に例えられます。親は子どもを授かることによって初めて親となることが出来、また、子どもは親なくしては存在し得ません。そのように、親と子が同時に生まれるという関係が、神様と人間との間にもあり、そういう関係を、金光大神様は、「氏子あっての神、神あっての氏子」と言われ、その間柄を、「あいよかけよ」と表現したのです。

私たちは、天地金乃神様とあいよかけよの関係での生き方を、生活の中で求めています。いつ、どこで、何をしていようとも、神様と共に私はある。その道理に目覚めると、大天地に満ちわたるいのちの息吹は我がいのちとなり、我が身の内にある神様が働いて下さって、どのようなことに出合おうとも、必ず道は開けていく。そうした確たる思いがふつふつと湧き起こり、

生きる力がみなぎってくるという実感があります。

もうはるか以前に亡くなられたある長老のお話があります。その先生はお弟子さんから、「先生、私の心がどうなったら、おかげを受けたというものでしょうか？」との質問を受けました。

するとその先生は、「そうじゃのう。天地の働きがどのように変わろうとも、有り難いという心が変わらぬようになったら、おかげを受けたというものじゃ。たとえ、身の上に何があってもぞ」と答えられたということです。

これは、よく耳にしていた話ですが、私自身、そういう心には、なかなかなり得ませんでした。しかし、様々な経験をする中から、人間の力ではとても及ばない天地のお働きに生かされているということを思い知らされたのであります。

今、時を経て、この話を思い出す度に、私自身が神様の御物（おんもの）であり、御働（おんはたら）きであるという揺るぎない確信が生まれています。

私どもは、昨年の東日本大震災によって、大きな悲しみや苦しみ、不安を経験しております。そして、たくさんの方々の死やふるさとの喪失、幾重もの悲嘆の事実にも直面し、その痛ましさや切なさに心が押し潰されそうな経験をしました。

そうした中で、先ほどのお話がふとよみがえり、私どもはこの天地の間に住まわせてもらい、天地のお恵みとお働きに生かされているという

事実に立ち返らされてもいます。

これからの一年間、私たちはどのような出来事に出合うでしょうか。これまで世界を安定させていた秩序が力を失い、先の見通しが立たない中で、今年も始まりましたが、それでもどこかに光明を見い出したいという思いは、誰しもがお持ちのことでしょう。

そんな時、遠い昔からはるかな未来へ向かって営まれる悠久の天地の働きと、今月今日の今を生きる自分との関わり合いについて、折々に思いを巡らしてみてはいかがでしょうか。

人間の思いや知識をはるかに超えた営みを、営々と続けられてきているこの天地。天地のいのちを頂いて、今月今日、生かされて生きている私は、今年も、世界の平和と人類の助かりのために、神人あいよかけよの道を歩み続けてまいりたいと願っています。

「何でも結構」

金光教今池教会　浅野　弓

「先生、この色紙に言葉を書いて下さい。つらいことがあった時、元気が湧いてくるような言葉がいいです」

差し出された色紙に、私はびっくりしました。「えっ、私が字を書くの？　色紙に字を書くなんて、政治家や有名な人がすること。私は字もうまくないし、気の利いた言葉も持ち合わせていないし…」と、一瞬、ためらいましたが、彼女の真剣なまなざしに押され、断れませんでした。

私に色紙を差し出した彼女は、三年前に名古屋に転勤してきて、私の奉仕する教会にお参りしてきました。

それまでとても順調に仕事をしてきた彼女でしたが、新しい職場は彼女にとっては予想以上に厳しい職場で、思い掛けない人間関係のトラブルや責任ある仕事の重圧に耐えかねて、彼女は教会に参ってきても泣いてばかりの時もありました。神様に祈り、話をしていくうちにようやく落ち着いてくるということを繰り返しながら、だんだんに彼女らしい優しさ、明るさを取り戻すことが出来ました。

悩み、苦しみながら耐えた三年間でしたが、人間としては一回りも二回りも大きく成長出来た三年間であったと思います。そして、この春、名古屋での転勤生活を終えて、次の勤務地に行く前に、最後の参拝をしてきたのでした。

彼女が、この三年間を大切に思ってくれているのが私には痛いほど分かりました。私は言葉を捜しました。何と書こうか…、思いを巡らす中に、私は父から聞いた話を思い出していました。

父が若い時の話です。

父は金光教の教会に入り、修行をしていました。そんなある日、父がとても尊敬している先生が教会に来られることになりました。

その先生は、お話もすばらしく、たくさんの本も書かれていて、父はその先生に心から傾倒していたのでした。

その憧れの先生に間近に会える、こんなチャンスはないと、どうしてもお会いしたいという思いになりました。

でも、ただの修行生の身ですから、お会い出来るような立場ではありません。隠れるようにして先生の休んでおられる控室に近付きました。手には一枚の色紙。色紙といっても、あり合わせの古びた色紙だったそうです。

父は恐る恐る控え室に近付き、声を掛けました。そして、先生の前に出て、「これに何か書いて下さい」と色紙を差し出しました。

その高徳な先生は、もじゃもじゃ頭の、哲学者を思わせるような風貌で着物を着て、机の前に座っておられました。ギロリと、力のある目が父を捉えました。

そして、「何と書くのか？」と尋ねられました。

父は、びっくりしました。その先生は、たくさんの色紙を書いておられ、その時、その人、その状況に合わせて、独特の味のある文字で色紙を書かれることで有名でもありました。

ある教会には、大きな畳半畳もあるほどの紙に平仮名で『はい』と二文字だけ書かれたものが残されています。先生の言葉には、いつも深い意味が込められています。『はい』という文字に込められた思いは、いつも気持ちのいい『はい』と返事の出来る心の調子が大切であるということでした。先生の手にかかると『はい』という、たった一つの言葉が、途端に輝き始めるのでした。

ですから、父は、先生が何か自分に大切なところを書いて下さる、書いて下さった言葉を大切にしよう、そんな思いでしたから、「何と書くのか」などと、尋ねられることは予想していませんでした。

「何と書くのか」という、思いがけない問いかけに、父は困惑し、考え、そしてようやく「な、何でも結構でございます」と、答えました。

すると先生は、色紙を受け取り、墨でさらさらと書いて下さいました。受け取ってみると、その色紙にはなんと…『なんでも結構』と書かれてありました。それは先生の持ち味でもあるウィットに富んだ言葉でありましたが、父は返す言葉に詰まりました。

先生は、父を優しく見つめながら、「なんでも結構、これは大切な言葉だよ。結構という字

は『結んで構える』と書く。難儀というものは、もつれから起こるのである。まず一つひとつのことを丁寧にほどいて見直し、それを結び直して新たに構えると結構になっていく。なんでも結構にしていくのが信心なんだよ」と話して下さったのでした。

折に触れて、何度も父から聞かされていた話でした。その色紙は残念ながら、戦火に遭い、焼失してしまいましたが、父の心に深く刻み込まれ、そして私の心にも生き続けている言葉です。

目の前の彼女は私が筆を執るのを、ゆったりと待っていました。

「むつかしいなぁ」「苦手なのよね、こういうこと」。ぶつぶつ私がつぶやいているのも、楽しそうに見ています。

思い切って私は、元気な字で『何でも結構』と書きました。

そして、父の話を紹介し、「私もね、何か問題が起こると、『難儀はもつれである』って言葉を思い出すのよ。糸が絡まっている様子を思い浮かべてみて。プツンと切ったらおしまい。ゆっくりゆっくりほどけば、また結び直せるじゃない？　あなたも新しい勤務地で、また人間関係に苦しむかもしれない。ハードな仕事に悲鳴を上げるかもしれない。でも、一つひとつ、もつれた糸をほどくように、丁寧に、丁寧に事に当たっていきましょう。きっと、するりとほどける時がくるからね。何でも結構…これが私

のはなむけの言葉よ」と、色紙を渡しました。
彼女はそっと色紙を抱き締め、何度もうなづいていました。

「伯母のお供え物」

金光教出石教会　大林　誠

都会で一人暮らしをしていた伯母がアルツハイマー病になって、実家である我が家に帰ってきたのは、今からちょうど十年前のことでした。

私が幼い頃、伯母は我が家で一緒に暮らしていて、私のことを我が子のように可愛がってくれていました。ですから私にとって伯母は、もう一人の母親のような親しい存在です。妻も伯母が大好きでしたので、同居することに全く異存はありませんでした。

しかし月日が経つにつれて、伯母の認知症は、ゆっくりと、しかし着実に進んでいきました。

一年ほど経ったころの伯母は、一日中、「まんじゅうが食べたい」と言い続け、ちょっと目を離すと、財布も持たずに一直線に近所のスーパーに向かいました。

「おまんじゅうちょうだい！」

店に入るなり、レジの店員さんに叫ぶのです。

まんじゅうを買いに行くこと自体は、店の人に事情を説明しておけば済むことです。しかし問題は、伯母が道の真ん中をずんずん突き進んでいくことでした。正面から車が迫ってきても、なぜか全く目に入らない様子です。交通事故に遭わないように、夫婦のどちらかがいつもピッタリ付き添っていなければなりません。心身共に疲れがたまっていきました。

そんなある日のことでした。私が仕事から家に帰った途端、妻が深刻な面持ちで、「今日は、ほんとにヒヤッとしたわ」と、日中の出来事を話してくれました。

我が家の筋向かいに、金光教の教会があり、私も妻も、毎日お参りしています。妻はその日の午後も、伯母が昼寝をしている間を見計らって、家に鍵を掛け、急いでお参りに行ったのだそうです。

ちょうど、年に一度のお祭りの前日に当たっていて、大勢の人が忙しそうに準備をしていました。神様に拝礼した後、妻は教会の先生に、事前の準備に加われないことをお詫びしたり、伯母の様子を話したりしていました。その時、すぐ後ろに人の気配を感じました。振り返ると、何とそこに、家にいるはずの伯母が立っていた

のです。おそらく朝食の時、私と妻が、「明日は教会のお祭りだね」と話していたのが、伯母の記憶の片隅に残っていたのでしょう。

教会に来た伯母は、トイレットペーパーを一巻き、大事そうに抱えていたそうです。そしてなぜか、その穴のところに、筒型に丸めた新聞広告の紙が差し込まれていました。

「先生、これ、神様にお供えして下さい」

伯母はそう言って、恭(うやうや)しくその謎の物体を教会の先生に差し出しました。先生はニコニコしながら、「はいはい、お供えさせて頂きましょう」と言って、受け取って下さったということでした。

「それにしても、スーパーの方へ行っていたら、危ないところだったね」と、私たちはそんな話をしながら、伯母の無事を喜んだのでした。

翌日の日曜日は、伯母がデイサービスで老人ホームに出掛ける日でした。伯母を送り出した後、私たち夫婦は早速、教会のお祭りに参拝しました。

教会のお祭りは、雅楽に似た厳かな音楽に合わせて、装束姿の先生方が静々(しずしず)と出てこられるところから始まります。しばらくすると、お供え物として、鏡餅やお神酒のほか、海の幸、山の幸を色とりどりに盛り付けた三宝を、人から人へ手渡しながら、次々に祭壇に運んでいく行事がありました。

その美しさに見とれていると、それらの中に一つだけ、とても地味なお供え物があるのに気付きました。白い円筒形のものに何やら細いも

のが刺さっています。紛れもなくそれは、昨日伯母が持って来たという、あのトイレットペーパーだったのです。

まさか本当にお供えされるとは…。教会の先生は、認知症の伯母が差し出したトイレットペーパーを、神様へのお供えとして、真心込めて扱って下さったのでした。

お祭りの後、私たちが教会の先生のところへ行ってお礼を申し上げると、「あのトイレットペーパーや広告の紙は、伯母さんには何に見えていたんでしょうかね。でもね、伯母さんにとっては、大事な大事なものだったに違いない。これを神様にお供えしてもらいたいという、ただその一心で、ここまで抱えてこられたんです。神様はね、人間のそういう一途な思いを、何よりも喜んで受け止めて下さるんですよ。伯母さんは、昔から神様を本当に大切にしてこられた。今もそれが、伯母さんのいのちに刻み込まれているんですね。何と、尊いことではないですか」

教会の先生は、時折声を詰まらせながら、こう話して下さり、私たちも胸に熱いものがこみ上げてくるのでした。

その時、私は気付かされたのです。お供え物の値打ちが、値段や見かけで決まるのではないのと同じように、人間の値打ちも、役に立つとか立たないとか、見栄えが良いとか悪いとか、そんなことで簡単に測れるものではないのだと。そして私たちを慈しんでくれた伯母を、どこまでも大切にしていこうと、心に誓ったのでした。

あれから随分時が経ちました。伯母は今、全く言葉が出なくなり、歩くことも出来なくなって、椅子に座って静かに毎日を過ごしています。そんな伯母に、まるで天地に溶け込んでいくような、清々しさと神々しさを感じるこの頃です。

「突然の病」

金光教伊予教会　石川教子

皆様、おはようございます。

さて皆さんは、今朝、目が覚めた時、一番に何を思いましたでしょうか。

「よく眠れてうれしいなあ」「昨日の疲れはすっかりとれている、ありがたいなあ」ですか？それとも、「あ～あ、もうこんな時間か、もっと寝ていたいなあ」でしょうか。今日はあれをして、これをしてと、すぐ仕事のことが頭の中を巡ったという方もいるかもしれませんね。

私は朝、目が覚めると、両手を動かしてみるのです。両足を動かしてみるのです。

「ああ動く、良かった、ありがとうございます」

と神様にお礼を言います。私にとって、両手両足が動くことが当たり前のことではない。ものが言えるのも、食べることが出来るのも当たり前のことではなくなったからです。

私は愛媛県にある金光教の教会で奉仕しています。今から四年近く前のある日、私は、参拝者の方と一緒に朝のお祈りをしていました。十分ほど経ったころでしょうか、突然体の力が抜けて前に倒れ、次の言葉が出て来なくなったのです。一緒にお祈りをしていた方が私の異変に気付き、すぐ夫に知らせてくれました。私には、頭が痛いとか、吐き気があるとか、手足がしびれるというような感覚は全くなく、自分の体に大変なことが起こっているという自覚がありません。しかし現実には、左の手や足に、そして顔面や舌にもまひが起きてきていたのです。

それでも私の口から出てくる言葉は、「大丈夫、大丈夫」で、しばらく横になっていました。しかし、ただごとではないと思った夫が、救急車を呼んでくれ、私は病院へ搬送されました。

病院では簡単な問診の後、すぐに血液検査をし、ＣＴやＭＲＩの撮影が行われました。結果は、心臓で出来た血の塊が脳血管に流れ込んで脳梗塞（こうそく）を起こしていました。直ちに薬を使ってその血栓を溶かす処置をして頂きました。

おかげで、間もなく左足が、次いで左手が動き出し、顔面と舌のまひも続いて回復いたしました。担当して下さったお医者さんに、教会でお祈りをしていた時に発症したことを話すと、「神様に助けて頂いたのですね、奇跡でしたよ」

とおっしゃいました。リハビリの計画も立ててくれていましたが、私にはその必要がないほどの回復でした。

神様に守られて助けて頂いたなあと思いました。

発作が起きたのが、教会でお祈りをしている時のことでした。人の幸せを祈り続けてきた場所です。これほど安心な場はないと思います。前日と前々日は、仕事で神戸に出掛けていました。道中でなくて、車の運転中でなくて本当に良かったと胸をなで下ろしました。また、決まった時間のお祈り中でしたから、信者さんも一緒で私の異変に気付いてもらえました。夫もたまたまその時間に教会にいました。

この病は、「時間」が回復のカギを握りますが、消防署が近いこと、そして病院まで車で二十分ほどの距離であることも幸いしました。血栓を溶かす薬を使えるのは、発症後三時間以内ですが、かろうじて間に合いました。この薬が日本で認可されたのは、その年の初めだそうです。ただ、よく効く薬だけに、副作用の恐れがあり、慎重に私の体調を見守りながらの処置だったようです。

こうして副作用もなく、後遺症もほとんどないほどに回復出来たのですが、しばらくは「こんなに元気だった私がどうしてこんな病気に？」という思いにとらわれていました。直前に受けた健康診断では血圧も血糖値もコレステロール値など、すべて異常なく、それまで身体に不調を覚えることもありませんでしたから。

しかし元気だったからこそ、この薬も使え、ここまで回復出来たことが分かりました。

またどこかへ出掛けるにも、車を運転する時も道中で何かあったらどうしようと、不安がいっぱいでした。しかしまるで奇跡のように、様々な有り難いことが重なって回復出来たことが分かった時、「いざという時は神様が守って下さる」と思えて、不安が和らいできました。

ただ、まひが回復したとはいえ、微妙に体に違和感はあります。その一つは言葉が出にくいことです。それで、人の前で話をするのに苦痛を覚え、尻込みをするようになっていました。

病気から三年ほど経過したころ、お医者さんから、血栓を溶かす薬を使える人は、病院に来た人、百人の内二十人ほどで、その中でも薬の効力がある人はわずか一人くらいだと聞かされました。私は、そんな狭き門をくぐり抜けていたのでした。これを聞いて、私は「話せる」ということを厳粛に受け止めました。流ちょうでなくてもいい、話せることをもっともっと大切にしよう。このことがないと、私はきっとそのうちに、神様に守って頂いて今がある、ということを忘れてしまう。これはそれを忘れないための試練であると受け止めました。

この病気は再発の確率が高く、確かに不安はあります。でも、不安で今のいのちを曇らせたくありません。今、頂いている、たくさんの出来ることを喜び、活かしていくことにいのちを燃焼し、お役に立ち続けたいと思うのです。

「見つかってよかった」

金光教邑久教会　小林　眞

生きていればこそですが、日々、いろんなことに出合います。楽しいことや悲しいこと、中には、出来ることなら出合いたくなかったことにも、です。

それは一昨年、私が還暦を迎えた年のことです。春先から、のどの奥に違和感を覚えるようになりました。その違和感は半年経っても治まらず、十二月に入ったころには、それが痛みに変わって、ついには我慢が出来なくなり、町の耳鼻科で診てもらうことになりました。

診察を待つ間、いろんな悪い予感が頭をよぎります。

ところが診察の結果は、意外にものどには何の異常も認められなかったのです。ほっと胸をなで下ろしていると先生が、「念のために内科で食道の検査をしてみたらどうか」と勧めて下さるのです。のどに異常がなかったのですから、普段の私だったら、しんどい内視鏡の検査を受けるはずがなかったのですが、なぜか自分にしては珍しく素直に聞き入れることにしたのです。

ところがその内視鏡の検査で、怪しいものが写ったのです。場所は思いもよらなかった、胃でした。その日から検査の結果が出るまで、落ち着かぬ日が続きました。

私は金光教の教師をしています。常日頃から、「何事が起こっても、それはすべて神様のお計

らいであること、何事もすべて神様にお任せすること、そして、すべてにお礼を言う心を大切にする生き方」の稽古をしています。

「どんな結果が出ようとジタバタすまい、自分では何も出来ないのだから」。一生懸命、自分にそう言い聞かせました。

検査の結果、それはがんでした。

「がんですね。でも初期です。手術になりますね」

がんという言葉を聞いて、さすがに動揺しましたが、それでもすぐに平静を取り戻すのが分かりました。

それから手術の日まで、食欲がなくなるでもなし、夜が眠れなくなるでもなしに、普段通りの一カ月を送ることが出来ました。

「初期」という言葉が後押ししてくれたこともありますが、がんの告知を受けて平静でいられることが、自分でも不思議でした。そして、手術をする心配よりも手術が出来る喜びの方が、日ごとに強くなっていくのを感じていました。

私は教師なのに、そんな立場で言うのもおかしいのかもしれませんが、すがることの出来る神様が身近にあることの心強さを、この時ばかりは本当に思い知らされました。もしすがるものがなかったなら、平静でいられることなど、とても自分には出来なかったはずです。

それでも白状すると、すぐに完全に神様に全てを委ねることが出来たかというと、そうでもなかったのでしょう、二～三度、こんなことが

ありました。

夢の中でお医者さんから、がんの告知をされて、そこで目が覚め、「ああ、良かった、夢だった」と喜ぶのですが、その後すぐに、がんは現実なのだと気付き、やはりちょっと落胆するんです。

手術する病院での詳しい検査の結果、手術は胃の全摘、すなわち、胃を全部取ることになりました。

「初期だから大したことはない」と思っていただけに、「全摘」という、まさかの診断には、さすがにショックを受けました。

家に帰り、胃を全摘するとどうなるのか調べてみると、やはり食べる苦労を伴うことが分かりました。無くなってしまうと決まってから、いろいろと胃の働きの大事さが分かりました。手術後は、少しずつ小分けにして食べることしか出来なくなります。「食べ放題」なんか、もっての外です。泡の出るビールともお別れです。

最初のうちはこんなふうに、出来なくなることばかりが頭に浮かんで寂しくもなりましたが、そんな時にはいつも、それを打ち消す努力をしました。それは、出来なくなることを中心にしないで、出来ることを中心にして物事を考える、ということでした。

たとえ胃が無くなっても、生きていける。慣れると、一度に食べられる量は減っても、何でも食べることが出来る、太ることはないので、ケーキもいっぱい食べられる。こんなふうに考えて、いつも自分を元気付けました。

そして入院、無事に手術も終わりました。手術後は、元気な姿を見てもらうために、いくらしんどくても、朝起きたら必ずひげをそり、髪もシャンプーして、出来るだけ身奇麗にしておくことに努めました。それは、がんという病気で周りに心配を掛け、見舞いまでしてもらい、その上でまた心配を掛けてしまったのでは、あまりにも申し訳ないと思ったからです。

私は、今回の病気を、「がんになったというよりも、がんが見つかって良かった」と思っています。病気のことは決して有り難いことではありませんが、のどの痛みからという、お医者さんも驚く、まさかのことで胃がんが見つかり、初期の段階で手術を受けることが出来たのです。

今、あの時の手術から一年が経ちました。おかげで、手術前と変わらないほど体調は戻りました。でも、これで私とがんとの関わりが終わったかと言うと、そういう訳ではありません。先々、ＣＴや血液検査など、定期検診はまだまだ続きます。

でも、心配はしていません。見えない先ばかりを見ていますと、どうしても心配になってしまいますが、私は、そんな不確かな先を見ることはやめて、事実だけを見るようにしました。

それは、今日もおかげで目を覚まし、そして生かされて生きている今がある、という事実です。そのことを喜び、そして感謝しながら、今日一日を大切にすること、それが一番であると分かったからです。

「摂食障害を乗り越えて」

金光教佐古教会　木村榮子

私は、縁あって金光教の教会に嫁いできました。そして二人の娘に恵まれました。長女は、看護師になりたいと、県外の大学に入り、一人暮らしを始めました。今から七年前の春のことです。

三年になった娘は、友人と沖縄旅行に行きました。数日後、帰って来るなり、「ウエストを細くしたいからダイエットする」と宣言しました。毎日カロリー計算し、おやつを食べると食事を減らし、必ず運動するなど徹底して実行し、思い通りに痩せていきました。八月に帰ってきた時、娘の手足はかなり細く、胸は肋骨（ろっこつ）が浮き出るくらいになっていました。私たち家族は驚いて、「もうそれ以上痩せる必要はない」と言いましたが、「まだウエストが太いから…」と、毎日食事制限してジョギングをします。

そのころ、若い女性が無理なダイエットをして拒食症になると聞いていたので、私は心配になって、拒食症のことを調べました。すると、娘の行動に当てはまる項目がいくつもありました。私は、娘に心療内科の診察を受けるよう勧めましたが、本人は、「病気ではない。自分でコントロール出来てるから大丈夫」と言って、聞く耳を持ちません。

冬休み近くなったある夜、泣きながら、「お母さん来て」と、電話してきました。私は、その泣き声に驚いて、すぐに飛んで行きました。

部屋に入ると、以前よりさらに痩せた娘がベッドで泣いていました。思わず抱き寄せて、その夜はそのまま休みました。

翌日、娘と話し合いました。最近一人で過ごすのが耐えられないほど寂しく、自分などいなくてもいい、価値のない存在と自己否定します。授業も休みがちでした。それで、病院に行くことを約束して、一緒に帰ることになりました。翌日、病院の診断結果は、「摂食障害」でした。この時すでに娘は、拒食から過食に転じていたようです。

過食は、食べたい欲求を自分で抑えられず、食べた後には太ることへの恐怖と、食べてしまった自責の念にとらわれ、吐く、下剤を飲む行為で、心が落ち着くようでした。でも、吐くと体のバランスが狂って、起きていられないほど体がだるくなり、寝てしまいます。食べる・吐く・眠る。この繰り返しです。通院とカウンセリングを続けましたが、なかなかその連鎖を止めることが出来ません。そして、リストカットもし始めました。

私は、どう対処してよいのか分からなくて、看護学校の教師をしていた姉に相談すると、娘の周囲の者や家族が時間をかけて辛抱強く愛情深く接していかないと回復が難しい心の病気だということでした。私たち家族は、必死に娘のことを神様にお願いしました。

そしてまず、食べ過ぎても吐かないことを目標にし、どんなに太っても私たちはあなたのことが大好きで、大切な存在だと言い続けました。

でも、娘の心の縛りは、なかなか解けません。四年になると大学では病院実習と国家試験の準備が始まります。今の状態ではとても無理、ゆっくり治療しようと話し合い、休学することを決めました。

四月が近づいたころ、娘に少し変化が現れました。病気を治したいという気持ちが生まれてきて、吐くことを何回か辛抱出来るようになりました。

新学期を迎え、私と娘は休学手続きと先生との面談のため大学へ行きました。新学期初日でクラスのみんなは、教室にいて、娘が休学することは親しい友人から伝わっていたようでした。娘は、今日がみんなと会う最後になるからと、昼休みの時間に教室へ行きました。すると、みんな大変喜んでくれ、イラストやユニークな写真たっぷりの模造紙二枚分の心のこもった寄せ書きを娘に贈ろうと用意してくれていました。さらに「一緒に頑張ろう」と言ってくれたのです。

そんな感動的な出来事があった後での学部長、担任の先生との面談に、娘の心は揺らいでいました。先生方は、開口一番に、「あなたのために私たちは何が出来ますか」と尋ねて下さいました。そして、娘に本当に休学でよいのかと確認しました。娘は、「みんなと一緒に卒業したい。けれども一人で厳しい病院実習をこなしていく自信がない。迷っている」と答えました。娘には、まだ食事管理と精神的な支えが必要でした。すると学部長が、「お母さんが、実

習期間中こちらに来て下さることを条件で、進級してはどうですか」とおっしゃいました。娘は、「頑張れると思います」と答えました。

その後、私たちは、病気の回復と、志望通り看護師になって、社会のお役に立たせて頂けますようにと、神様にお願いしました。私は、さらに心の中で、「摂食障害で苦しんでいる人たちの気持ちに寄り添えるようなお役に立たせて下さい」と押してお願いしました。

こうして五月から七月末まで平日は娘の所、休日は家に帰るという私の生活が始まりました。娘もよく頑張り、一日も休まず実習を終えることが出来ました。さらに地元の病院に就職が決まり、卒業後は、毎日忙しく過ごすようになりました。

過食の回数も減り、薬は飲まなくても大丈夫になり、そして昨年結婚、男の子を出産し、母親となりました。今振り返れば、休学することなく頑張れたことが、今の幸せにつながったのだと思います。たくさんの人たちに支えられて、今の彼女があります。

そして忘れてはならないのは、そういう人たちを娘の周りに引き寄せて下さった神様のお働きです。娘は、この体験からお願いすることの大切さが分かったようでした。神様のお働きを感じたのでしょう。今は家族みんなで教会に参拝しています。

「ありがとうを頂いた」

金光教大橋教会　小出雄三

年齢も三十歳を過ぎた自分にとって、「ありがとう」という言葉を言うことは当たり前になっていました。

「『ありがとう』と言いなさい」と、言われ始めたのは自分が何歳ごろからか覚えていませんが、気が付けば、言うことが義務のようになっていました。お礼は何かをして頂いた時にしなければいけないもの、「ありがとう」は言わないといけない言葉のように思ってきました。

自分が、「ありがとう」と言った時、何か嘘をついたような気分になることがあります。それは、「ありがとう」の一言を礼儀としてつぶやくだけになっていたからだと思います。そして、自分が言う以上、人からも言ってもらえるのが当然と思っていましたし、言わない人は礼儀知らずだと思ってきました。

そのような考え方でしたから、心からのお礼というのは、本当に大きなことをして頂いた時に出るものだと信じていましたし、「ありがとう」の言葉を掛けられるよりも、人間関係の向上といった結果で、人は幸せに感じるのだろうと思っていました。

しかし、金光教を信心するようになって、「ありがとう」には、本当に人を幸せにする力があると思えるようになりました。

少し前のことですが、職場のみんなのお昼ごはんを買いに、自転車でコンビニに行くと、一

台のワゴン車がすごい勢いで歩道に乗り上げて駐車してきました。「歩行者もいるのに危ないな」と思いながら、コンビニで弁当を買い、外に出ると、その車が路肩に乗り上げてしまっていて、タイヤが空転していました。その時の気持ちを正直に言うと、「困っているだろうけど、危ない運転しているからそういうことになるんだ、自業自得だよ」としか思いませんでした。

その車には一人しか乗っておらず、運転手の方は周りに助けを求めるようにキョロキョロしていました。コンビニの周りには何人かの人がいましたが、誰一人として助けようとしないように見えました。

私は、「手伝いたいけど、スーツが汚れるしな」「もともと自分がまいた種だし、向こうが頼むのが礼儀だろう」「先輩を待たせているから早く帰らないといけないし…」「若い人が何人かいるのだから、誰かが手伝うだろう」と自分が手伝いたくないことを自分の中で正当化して、その場から逃げようとしました。

しかし、自転車のかごに弁当の入った袋を入れた時、いつも金光教の先生から言われている、「顔を上げて周りを見れば、神様が素晴らしいことを用意して下さっているのに、自ら下を向いて、素晴らしいことを見ないようにしてはいけませんよ」との言葉が、ふと心に思い浮かびました。

その一言を思い出すと、見て見ぬふりをして、人が困っている場から逃げようとしていることが、申し訳なく思えてきました。

そう思っても、気が付いた時に声を掛けていなかったので、今さら声を掛けにくいんです。やはり逃げようと思いましたが、気が付くと、本当に嫌々ながら、「後ろから車を押しましょうか」と声を掛けていました。

車を押す手伝いをすることになっても、往生際が悪く、スーツが汚れないように気を付けながら、手だけで押していましたが、車は全く動きません。スーツが汚れても仕方がないと覚悟を決めて、肩を押しつけて全力で押しましたが、それでも動きませんでした。

心の中で、「やっぱり手伝うんじゃなかった、困ったな」と思っていると、ずっと見ていた学生と思われる青年が、「手伝いましょうか」と声を掛けてくれました。「もっと早く手伝ってくれ」と思いましたが、礼儀から、「ありがとう」と言い、二人で押しました。すると、それまで全く動かなかったその車が簡単に動いてくれました。

ほっとして、その青年にお礼を言わなければいけないと思い、青年のほうを振り返ると、なぜか、「ありがとうございました」と、その青年が丁寧に頭を下げていたのです。

どうして自分がお礼を言われているのか分からず、私は「ありがとう」と言えませんでした。手伝ってもらったのだから、自分がお礼を言わなければいけないのに。

のどまで出掛かった、「ありがとう」に言葉を詰まらせて、「ああ」と言葉を出すのがやっとだったのですが、その飲み込んだ、「ありが

とう」が、胸の中に幸せな気持ちを広げました。

非常に驚いた私は、けげんな顔になっていたのに違いないのですが、その青年は気にも留めず、笑顔のままで自転車に乗ると去っていきました。去っていく青年を目で追っていると、今度は車の持ち主が車を止め、こちらへ走ってくるのが見えました。「来なくていいですよ」と、その方にジェスチャーしながら、自分でも不思議なほど、大きな声で、「ありがとうございました」と言っていました。相手もひどく驚いた顔になりましたが、すぐに笑顔になっていくのが見えました。

金光教の先生が教えて下さった、「顔を上げて周りを見れば、神様が素晴らしいことを用意して下さっている」。この言葉に支えられ、勇気を出して手伝ってみれば、お礼を言うべき青年に、逆に、「ありがとう」と言われました。全く不思議な、「ありがとう」の言葉でしたが、これこそ、神様が用意して下さった素晴らしいものでした。私は何とも言えずうれしい気持ちがして、思わず車の持ち主に、「ありがとう」と言っていたのでした。

置きっぱなしにしていた自転車に向かいながら、気にしていたスーツに付いた汚れを手ではたくと、意外と簡単に汚れが落ち、自分がつまらないことにこだわっていたように思えて、笑えてきました。人を助けてやろうとの思いでしたが、本当に助けられたのは自分でした。

お礼を言う相手をそれぞれ間違えたようなものなのに、昔の自分なら怒っていたのだろうか

と思いながら、ふと、空を見上げるとお日様が笑ったように、いつもより輝いているように感じました。

「4年に1度の記念日」

金光教名城教会　河合利男

私は、今年も一つ年を重ねて五十四歳にならせて頂きました。

私には、四年に一度巡ってくる記念日があります。今から三十六年前、当時十八歳のやんちゃ盛りの高校生であった私は、高校を卒業したら、金光教の教師となるための学校である金光教学院に入学する願いを立てておりました。

しかし、高校を無事卒業し、三月中旬には入学試験を迎えようとしていた矢先の二月二十九日に交通事故を起こして、入院することになりました。

事故に遭った当日は、車で近くの教会へ参拝

する途中でした。父である教会長には、「雨も降っているから車じゃなく、地下鉄で参拝しなさい」と言われましたが、私は車の方が乗り換えもないし楽だからと、父の言葉を無視して車を走らせ、十分も走った頃に事故は起こりました。

交差点で右折をしようとしていた車に、ノーブレーキで突っ込み、後続の車にも追突され、額を含めて五十針を縫う大事故でありました。誰が呼んでくれたのか分かりませんが、救急車を待つ間に、閉めていたネクタイで止血をしてもらい、歩道脇のビルの片隅に横たわっている時に、「可哀想に、あの子死んじゃうのかね」との声がかすかに聞こえて、私の薄れていく記憶の中で、「死んでたまるか」と思ったことが今でも思い出されます。

連絡を受けた父はすぐに病院へ来てくれ、私の治療を終わるのを待って、駆け寄ってきました。私は怒られると思っていましたが、父は、「他の信者の方々もおまえのことを願って下さっているから、神様に心からお詫びをして、命あることにお礼を言おうな」と、一言私に言葉を掛けました。その日以来、退院するまで毎日、私のために父はご信者の皆さんと御祈念を続けてくれました。その祈りの甲斐あって、骨折はなく外傷だけで済み、二週間で退院させて頂きました。

入院中、私は、「お詫びをして」という言葉を思い返しました。「雨だから車で行くな」と言った父の言葉に耳を傾けなかったことが、胸

に引っかかりました。

高校時代、通っていた学校の先生から、「何でも言われているうちが花やぞ。言ってくれるうちは、あなたのことを心配もし、何とかしてやりたいと思って言って下さるんだ。こいつには言っても無駄じゃと思ったら、誰も何も言ってくれなくなるぞ、言われておるうちに気付かないとな」と、言われたことを思い出しました。

いざ金光教の教師を目指して一年間修行に入らせて頂くと言っても、「親に言われたから行く」「嫌だったら帰って来たらいい」などというような、いい加減な気持ちの自分であったことを、この交通事故を通して思い知らされました。

退院後、入学試験にも間に合い、無事に入学、一年間岡山にあるご本部での修行に入らせて頂くことが出来ました。

ご本部での修行中、約二週間ほど、指定された教会で実習をするカリキュラムがあります。私は、岡山県のある教会に行かせて頂くことが決まりました。ところがその矢先に、実習先の教会の先生や信者さんらの乗っていた車が、大型トラックに追突され大破するという事故に遭われ、先生方は入院されたのでした。私がちょうどその教会での修行を終えようとする頃に先生方は退院され、いろいろとお話を聞かせて頂きました。「息の差し引きが出来ることが本当にありがたい」と話されるその言葉に、私も半年ほど前に事故に遭って、確かに命あることがありがたい、皆様の祈りの中に生かされている

命と、改めて気付かされました。しかし、何気なく当たり前のように行っている、息を吸ったり、吐いたりすることまでもが有り難いとは思いも寄らないことでした。

その大切な当たり前のことが当たり前に出来ることの大切さを、その教会での修行で思い知らされました。それは、まるで私のために仕向けられたような、有り難いような、申し訳のないような複雑な感じがしたのを今でも忘れません。

無事に一年間の修行を終え、私は今、教会の御用に使って頂いておりますが、あの時の事故で命を失っていたら、今の私はありません。もちろん妻と出会うこともなく、三人の子どもたちを授かることもなく、今こうして皆様の前で話すこともなかったと思った時に、私たちはもちろん一人ひとりが、生まれながらに祈られ育まれ生きていることを実感します。

事故に遭った二月二十九日は、四年に一度しかない私の記念日です。今年で九回目の記念日です。誕生日や結婚記念日などを祝うと同じように、私は「命の記念日・祈りの記念日」として、心からその日一日を大切に迎えたいと思っています。

自分のわがままで起こった事故、それをとがめることもなく、祈ってくれた、その祈り。あれから三十数年が経った今日では、周りの人の祈りは言うまでもありませんが、神様が私たち一人ひとりに掛けて下さっている思い、祈りの深さを、御用を通して深く感じております。

「元気をもらった　気仙沼でのボランティア」

金光教東京学生寮寮監　辻井篤生

私は東京の小金井市にある金光教東京学生寮の管理者として勤務しています。

二〇一一年三月十一日、今まで経験したことがない大きな揺れを感じました。東日本大震災です。首都圏の交通もまひし、寮生たちも帰宅困難となり大変でした。

その寮生の一人に宮城県気仙沼出身の斉藤さんという方がいます。ご両親と妹さんの四人家族で、地震直後、家にいた妹さんとは携帯メールで連絡は取れましたが、その後はご家族と全くつながらなくなってしまいました。ご両親はそれぞれ違う仕事場です。

私たちは集会室の大きなテレビをずっと見ていました。気仙沼市内は大火災が発生しました。映し出される映像のあまりの惨劇に、掛ける言葉もありませんでした。それでも多くの寮生仲間が斉藤さんに寄り添い、励ましていました。斉藤さんは募る不安を押さえきれず、家族に連絡を入れ続けました。

震災から五日後、やっとつながりました。妹さんは斉藤さんとメールした後、すぐに避難して間一髪助かり、そしてご家族もみんな無事でした。しかし、斉藤さんの家は津波で流されてしまいました。

斉藤さんがお参りする気仙沼教会は、急な坂の途中にあって、すぐ隣のお家まで波が押し寄

せましたが、ぎりぎり難を逃れました。

教会では、隣接する避難所に入りきらない被災者を受け入れ、五十日間にわたり、普段神様に祈りを捧げる場所を開放しました。そして、気仙沼教会のご信者さんたちは、地元の方とともに避難所となった自治会館で炊き出しをされました。

その後、金光教首都圏地震等災害ボランティア支援機構から大勢の人が、気仙沼教会を拠点にボランティア活動を進めました。多くの寮生たちも二度、三度と気仙沼を訪れ、私も合計四十日間ほど活動をいたしました。

地震から一カ月後、最初に車で被災地に入った時、何事もない市内の様子が、ある角を曲がった途端に一変し、言葉を失いました。どうしても現実のこととは思えず、まるで映画のロケ現場に来たのではと思えました。現実の光景とテレビの映像で見る印象は、全く違いました。

私たちのボランティアは、教会がある南町の被災者の方の要望に応えたり、気仙沼市の災害ボランティアセンターへ出向いて活動しました。何とも言い表しようのない異臭が漂う中、最初の頃は、泥かきやがれきの撤去等、泥まみれになったお家を掃除したり、畳や家財道具の運び出し、遺留品の仕分けや流された写真の整理などが多かったです。

そして、半年を過ぎる頃からは、仮設住宅への物資の支援やかき氷の提供、マッサージやお茶会の実施、花壇造りや自治会発足のお手伝いなど、特に住民が孤立しないような孤独死防止

のボランティアになりました。

私たちは、避難所が隣接していることもあり、被災者の皆さんと共に活動したり、毎日夜にはミーティングを行い、それぞれ活動報告や感想、反省点を出し合い、より良い活動を模索しながら進めました。

そこで学んだことは、掃除をしてただ奇麗にすることだけではなくて、奇麗にすることによって被災者の方の心が救われていく。ただ物を提供するだけではなくて、そのことによって少しでも被災者の皆さんに寄り添い、その心が助かっていく支援をさせて頂く。往々にしてヒーローになりがちな自分自身を戒め、あくまで被災者の方々に心を向ける気持ちが大切だということでした。

ある被災者の方のお宅は、気仙沼湾の一番奥まったところから二百メートルほどの所にありました。建物の三階くらいの高さの津波が襲い、母屋はすべて流され、離れだけが残りました。普通は五分で行ける自治会館へ、地震当初は、三十分以上もかかっていたそうです。がれきで道路が埋まってしまい、その上を乗り越えていくので大変苦労したとのことでした。

離れは、一階を炊事場とお風呂、二階を物置にしていましたが、最初の頃は片付ける気力もなく、心がすさみ、投げやりになっていたとのことです。しかし、近所で活動する金光教のボランティア活動で周りがだんだんに奇麗になっていくのを見て、やる気が出てきたとのことで、私たちも一緒に掃除をさせて頂きました。

三日間かけてほぼ片付き、整理が出来たその日の夜、避難所に現れたこの方を見て、避難所の皆さんが、「服装も爽やかになり、顔付きも一変、とても穏やかになった」と口々におっしゃっていました。

この方は私に、「地震当初はどうしたらいいか分からず、落ち込んでいたが、教会の掲示板に掲げられた、『何とかなる』という言葉に励まされ、勇気が湧き、救われた。金光教さんには本当に感謝している」とおっしゃって下さいました。私はその言葉に感動し、涙を押さえるのが精いっぱいでした。

このたびのボランティア活動で、「最初はどう被災者の方と触れあったらいいか、恐くて不安だった」という多くの寮生たちも、逆に、「『感動』を、『生きる喜び』を、『元気』をもらった」と、何事にも代え難い経験をさせて頂きました。ここで出会った被災者の皆さん、一緒に活動した仲間とは、たった数日の出会いでも一生の友人を得たと言ってもいいほどの深い絆で結ばれました。

そして、この経験を通して得たものを日常生活にも現し、多くの人に、「人と人とが助け合う喜び」を伝え、現していきたいと願っております。

「大地震大津波に出遇って」

金光教石巻教会　井上直文

はじめに、昨年三月十一日の大地震、大津波に遇われ思いも寄らない大きな難儀を被られた方々、そして、今なお難儀の中にある方々に対しまして、心よりお見舞い申し上げ、その難儀からの助かりと立ち行きを神様にお祈り申し上げずにはおれません。

私も石巻で、大地震大津波に出遇い、大自然の脅威と人間の力の限界を痛感させられました。津波の去った後、残されたこの二十一世紀の世とは思えない惨状を目の前に、絶望と不安に押し潰されそうな中、計り知れない神様のお働きと多くの方々の深いお祈りと厚いご支援を受け、希望と安心を取り戻し、一歩一歩着実に復興の歩みを進めています。本当にありがとうございます。そして、絶え間ない神様のお働きと皆様のお祈り、ご支援の一つひとつにお礼が行き届かないことのお詫びの気持ちでいっぱいです。

私が体験したこと、見たこと、聞いたこと、知っていることは、極々一部のことですけれども、今として、思うところをお話させて頂きます。

最初に、石巻市、東松島市、女川町、二市一町からなる石巻地方の被害状況について申しますと、三月十一日のあの痛ましい有り様は、皆様がテレビや新聞雑誌でご覧になった通りです。人の命に関わるところでは、暮らしていた

人の数に対して、およそ三十六人に一人の方がお亡くなりになり、あるいは未だ見つかっていません。町に住む誰もが大切な人、親しい人を亡くし、つらく悲しい思いをされています。また、建物の被害の一部ですが、全戸数のおよそ二軒に一軒の住まいが、流失、全半壊により、多くの方々が不自由な生活を強いられています。本当に大きな大きな被害です。

そういう中に、幸いにも私たち家族は命を落とすことなく、教会の建物は傷みは激しいものの、何とか教会活動と生活を営むことが出来ています。

振り返れば振り返るほど、平成二十三年、三月十一日、金曜日。天気は雪。二時四十六分の激震、三時四十八分の大津波到達。教会のある場所、それぞれが居た場所。それぞれのその日その時間の勤め。あらゆる物事の何かが一つでも、ちょっとでも違っていれば、教会は流失していてもおかしくないと思わせられます。家族の誰かが命を亡くしていてもおかしくありません。日を重ねるにつれて、そう思えてなりませんし、「深い神様のお計らい」を強く感じずにはおれません。しかし、それは、難儀に遭われた多くの方々の痛み悲しみ苦しみと背中合わせであるということを決して忘れてはなりません。

大地震大津波に出遇って一年になります。

これまで、思いもしなかった様々な困難や悲しみやトラブルにも出遇ってきました。水道、電気、ガスを一切断たれた不自由な生活。どこ

にいてもどこを触っても泥まみれ、ほこりまみれの生活。大切な人を亡くした方の深い悲しみに触れる時のいたたまれない気持ち。先の見えない生活再建への不安。お互い助け合いながらも時として起きる人と人とのトラブル…。

その度に、どうしてこんなつらい目に遇わなければならないんだ。いつになったらこんなつらい思いをしなくて済むようになるんだ。地震も津波も夢だったらいいのに、ウソだったらいいのにと、これまで何度も何度も復興に向かう心が折れそうになりました。しかし、どっちを向いても、いつになっても、夢でもウソでもない。受け止めていくしかない現実です。そして、ありのままを受け止め、その中で生きていく私であるという事実です。

あの日以降、いろんな思いが移り変わりいく中、変わらぬ思い、そして強くなっていく思いがいくつかあります。その中の一つに、この大地震大津波と私の関係はいったいどういうものなのか、という問いを持ち続けています。

金光教の教祖様は「天地は生き通しである。天地が生きているから、人間もみな生きていられるのである」「天地のことをあれやこれやと言う人があるが、人間では天地のことはわからない。天地のことが人間でわかれば、潮の満ち干もとめられよう」と説いています。大地震も大津波も、太古から繰り返されてきた、地球が地球であるための営みであり、決して人の力の及ぶところではなく、人がコントロール出来るものでもない。その地球の上で、天地のお働き、

恵みを受けていかなければ生きることの出来ない私たち人間なのではないでしょうか。

その信心を進める私として、平易な稚拙な言葉ですけれども、私なりに現しますと、「私の住んでいる石巻の町に大津波が来てメチャメチャにしてしまったのではない。大地震、大津波、台風、暑すぎる日、寒すぎる日があり得る天地、その天地の一隅の石巻の町にただ私は住まわせてもらっているだけなんだ。三月十一日以前もそうであったし、あの日あの時もそうであった。そして、三月十一日以降、これまでも、これからもずっと私は、天地のお働きの中で神様のおかげを頂いて、大地震、大津波が起こり得る石巻の町にただ住まわせて頂いていくのだ」と思うのです。

大津波を〝天災〟として、敵とみなして憎みつつの復興ではなく、「天地の営み」として謙虚に受け止めつつ復興を進めていく生き方こそ、天地の中で生かされている人間としてのあるべき姿ではないでしょうか。だから私は、「震災を受けた私」「被災した私」ではなく、「大地震大津波に出遇った私」なのだと思うのです。

そういう思いで、天地と私の関係、順序、立場を大切に忘れずに、これからの復興の歩みを進めさせて頂きたいと願っています。

今として私が思うところをお話させて頂きました。ありがとうございました。

「ぼくの町だ」

金光教福島教会　金光昌子

私の古里は岡山県です。金光教本部のある金光町で生まれ育ちました。現在は福島県の金光教の教会に嫁いでおります。

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、千年に一度と言われる程のマグニチュード九・〇の巨大地震が起こりました。突然、ゴオーという何とも恐ろしい地鳴りが聞こえました。すると、今度は建物が、グラグラと強く左右に揺れて、何かにつかまっていないと立っていられない状態でした。思わず、「金光様、金光様」と神様に唱えていました。

その後も強い余震が続き、福島市内では水道が止まってしまい、各地域に給水所が設けられました。一人一回六リットルの飲料水を列をなしてもらいに行く日が続き、トイレの洗浄水は近くの阿武隈川へバケツを持ってくみに行きました。初めての体験で、バケツにロープを巻きつけ、コンクリートの斜面から注意しながらくみ上げました。

震災後は、どこのお店も開店出来ず、四～五日経ってから営業が始まり、開店前から大勢の行列が出来、約二時間待ってお店に入りましたが、あっという間に陳列された食品が全て無くなるという状況でした。

このような時、心配して下さった方々から食品や生活用品など支援物資を送って頂き、「ご家族やご信者さんは大丈夫ですか」「何か困っ

たことや必要な物があれば遠慮なく言って下さいね」と、心温まるお手紙やお電話、メールなどで激励のお言葉を頂き、我がことと共感して下さり、また、懐かしいお声を聞き、とても心丈夫になりました。一週間後に水道が復旧しましたが、その間、洗面や食事の仕度など、少ない水を大切に使う日々で、お風呂にも入れず、普通の生活が当たり前のように出来ることのありがたさを強く感じました。

特に福島県では大変なことが起きてしまいました。福島第一原子力発電所が大地震と大津波により全電源が停止し、水素爆発を起こし、放射性物質が広い範囲にわたり拡散してしまいました。私の住んでいる福島市は原発から北西に約六十キロ離れていますが、放射性物質がどんなに危険なものなのか分からないまま、普段通りの生活をしていました。少しずつ情報が入ってくる中で、「外出の時にはマスク、帽子、手袋をする。雨には濡れない。洗濯物は外に干さない」などを心掛けました。

原発事故によって、天地の恵みである土や水や空気を一瞬にして汚し、多くのいのちあるものに大変な影響を与えてしまいました。そして、日本全国の都道府県にたくさんの人が避難するようになり、特に乳幼児と児童を持つ親御さんや妊婦の方は、健康被害を防ぐためにやむなく避難をしています。被災された方々は、大変心を痛めて困難な状況の中、日々の生活をしています。皆さんの近くに避難された方がおられましたら、快く迎えて、真心のある言葉で接して

頂き、優しく見守って下さいますようお願い致します。

月日が経つごとに、明らかにされる原発事故の問題に対して私は憤りを感じます。これからの生活の上で特に食の安全性が心配です。そして、子どもたちの健康被害のこと、十八歳以下の子どもたちは甲状腺がんの検査が始まりましたが、一生涯続けることになってしまいました。将来の子どもたちのことを思うと、とても不安になります。

思い起こせば、私の長男が幼稚園の頃に福島県外から車に乗って帰宅途中、夕方の町に明かりが灯り、福島市に入ると、福島盆地にある街並がキラキラと光っていました。すると、長男が、「あっ、ぼくの町だ」と言ったのです。その言葉を聞いて、私は、「この子の古里は福島なんだ」と実感しました。改めて、「福島で生まれて、福島で育ったのだ」とうれしく思ったことがありました。

現在、汚染されているこの生まれ育った土地、空、海の再生をひたすら願うばかりです。私にとってもご縁を頂いて二十七年になり、福島は第二の古里になりました。「この福島を守りたい」という思いでいっぱいです。

また、私が今日思うことは、震災に遭い、原発事故に遭っても、今までと変わることなく、起きてくることをそのまま受け止め、汚染した天と地にお詫びを申し、御霊様のことを願い、これからのことをお祈りさせて頂くことです。

あるご信者さんのお話ですが、七夕のころ、

東京にいる小学一年生のお孫さんから写真付きのメールが届きました。その短冊には、「ふくしまの人が元気にくらせますように」と書いてあり、福島のおじいちゃんとおばあちゃんはお孫さんの優しいメールを見て、涙を流して喜んでおられました。この方は、娘さん家族や息子さんのことを教会に参拝し、お願いをされ、お孫さんが福島に来られると、餅つきなどの教会行事にも参加をされています。私は、お孫さんの純粋な優しい心に触れ、祈り合う心が親から子へ、子から孫へと受け継がれていると思い、ほのぼのとした気持ちになりました。お祈りの大切さ、祈り合う心の喜びを一層感じました。

震災にあっても、いつもと変わらぬ福島の空、そして、大地に根付く草花を見ていると、天地の力を感じます。天地の恵みの中で、福島の子どもたちが元気な心と元気な体を頂いて、大きくたくましく育ってほしいと思います。これからの東日本大震災の復興と原発事故の一日も早い終息を願い、このような過ちを二度と繰り返さず、平和で安全安心な暮らしが出来、子どもたちの明るい未来が開けますように共に歩ませて頂きたいと思います。

「お寿司を食べに行った話」

金光教曽根教会　島谷一久

私の父は四十歳という若さで突然亡くなりました。当時まだ幼かった私は、亡くなった父のおなかの上で遊び、その姿が余計に周りの涙を誘ったそうです。

それから年月が経ち、私が三十歳を越えたころのことです。

「考えてみれば、親父はあと十年の命だったんだな。そんなに早く亡くなって、さぞ悔いが残っただろうな。私だったら、死んでも死にきれないなあ」

そんな思いが時折頭をよぎるようになりました。そして、「もしかするとこの私も、あと十年しか生きられないのかもしれない」という不安が、しだいに重苦しさを増していったのです。

そこで私はある教会の先生に、父のことについて、胸によどんでいる思いを正直に打ち明けました。

すると先生は、「あなたのお父さんは悔いは残っとらん。けども思いは残っとるんぞ」と言われました。

「思いが残っているとは、どういうことですか？」と私が尋ねますと、「亡くなるというのはなあ、姿形が無くなるということで、御霊（みたま）は生きて働き続ける。可愛い息子のことじゃもの、お父さんは、亡くなってから今に至るまで、片時もあなたのそばを離れずに、守り続けて下さっとるんぞ」と、教えて下さったのです。

その時ふと、数年前の思い出が記憶の底からよみがえってきました。

それは、私の一番下の弟が成人式を迎えた時のことです。普段私は兄貴らしいことを何一つしてこなかったものですから、こういう時ぐらいはお祝いをしてやろうと思い立ち、弟に、「おまえの好物の寿司をごちそうしてやる」と声を掛け、二人でお寿司屋さんへ出掛けたのです。

そのお寿司屋のおじさんは、私の父の大親友だった人で、父が亡くなってからもずっと私たち家族のことを心に掛けてくれ、姉の結婚式にも出てくれる、そういう心安い間柄でした。

とはいえ、そのお寿司屋さんは値札の掛かっていない、いわゆる高級店です。ですから、私はわずかな貯金を下ろし、そのなけなしのお金を握りしめてカウンターにつくなり、「今日は弟の成人のお祝いなんです。おじさん、今日はこれだけのお金を持って来ているから、この範囲で食べさせて下さい」と頼みました。続けて、「今日は親父と一緒に来ました」と、懐から父の写真を取り出して、カウンターの上へ置きました。

正直に申しますと、写真まで持ってきたのは、少々下心があってのことでした。「今日は親父と一緒にお祝いです」と言えば、おじさんはきっと喜んで、サービスしてくれるに違いない、と思ったからなのです。その期待は見事に的中し、おじさんは大変喜んでくれ、そして父との懐かしい思い出話をしながら、こちらの予算以上にたくさんごちそうしてくれたのでした。

その時のことを思い出し、「御霊が生きて働き続ける」とは、こういうことではないだろうか、と思いながら、私はその話を先生に申しました。

先生はジッと私の話を聞いて下さり、そしておもむろに、こうおっしゃったのです。

「あなたは、自分が写真を持って行ったと言うが、そう思っておったら、それは違うぞ。あなたのお父さんが、子どもたちと一緒に親友のところで寿司を食べたいと思って、あなたたち兄弟を連れて行ったんぞ。お父さんには、悔いは残っとらんけどな、こういう子を思う親の思いが残っとるんぞ」

私は目から鱗(うろこ)が落ちました。

「先生の言われる通りに違いない。父は、よくぞここまで大きくなってくれたと、私たちの成長を喜んで、お祝いしてくれたのだ…」

私はその時、父の温もりにじかに触れたような気がして、胸が熱くなりました。

家に戻った私は、父の霊前に座り、「お父さん、あなたは御霊様になって私たちを守って下さっているんですね。今日はそのことをよく分からせてもらえました。ありがとう。元気を出します。これからも、いつもお父さんと一緒です。またお寿司に行きましょう。いや、連れて行って下さい。付いて行きます」と、拝まずにはいられませんでした。

私の家では、神様と、ご先祖の御霊様とをお祭りし、毎日必ずそこへ座ってお祈りをしています。それはずっと以前から続いている習慣な

のですが、このことがあって以来、祈る時の私の気持ちが、少し変わってきたように思います。

こちらから拝んでいるというよりも、逆に神様やご先祖様の方が、こちらより先に私たち家族に向かって、「どうかみんな幸せであってくれよ」と、拝むように願いを掛け、手を差し伸べて下さっているのではないか、という気がしてきたのです。

そんなふうに感じるようになってしばらくした頃、ふと気が付けば、私を苦しめていたあの思い、「長く生きられないかもしれない」という不安は、いつしか霧が晴れるように消え失せていました。

私がそんな不安に取りつかれていたのは、こちら側から一方的にお願いするばかりで、神様、御霊様の温かいお心を感じ取ろうとしていなかったからなのだと思います。

これから先、私にとってうれしいことや楽しいこと、また、つらいことや苦しいこともあるかと思います。しかし何があろうとも、この神様の思い、親先祖の思いをしっかりと受け止めていけば、元気な心で生きていけると、私は確信しています。

私は今日も、心新たに、神前、霊前に拝礼します。私の願いを届かせるためだけでなく、神様、御霊様の温かさに触れるために。そして周りの人々に、この温かさを伝えてあげたいと手を合わせます。

「ビバ！　大阪人」

金光教松島教会　和田晴子

皆さんは「大阪の人」と言うと、どのような印象をお持ちですか。

「明るくパワフルで、お金に細かくせっかちで、大きな声でとにかくよくしゃべる！」。九州の田舎で生まれ育ち、「大阪の人」と言うと、テレビで見る漫才師やタレントのイメージしかなかった私は、そういう印象を持っていました。そんな私が、まさか大阪の街へお嫁に来るとは…。

結婚し、主人の両親と同居しています。最初の頃、食卓での家族の会話が全く聞き取れませんでした。テンポが速い上に、前の人の話が終わらないうちに、次の人がかぶせぎみに話をし始め、また次の人がかぶせて話をします。

お母さんの話に、お父さんが返事をし、それに主人が相づちをする。お母さん、お父さん、主人。私もその会話に参加しようとタイミングを計っていると、気が付けば次の話題に進んでしまいます。

最初は、「大阪のテンポにまだまだついていけないな」と思う程度でしたが、「誰かが話している間は黙って聞くものだ」という九州の土地で育った私は、だんだんと、「人の話は最後まで聞こうよ！」という思いが湧いてきたのです。

その考えが変わったのは、お嫁に来て半年ぐらい経ったころ、金光教の青年たちの集まりに

参加した時のことです。

みんなの会話を聞いていると、いつものように、かぶせ合いながら話をしているのですが、お互いの話はちゃんと聞いているようで、最後にはちゃんと理解し合って、笑い合って会話が終わっているのです。「なるほど」と思いました。そして、「大阪の人のボケもツッコミも、大阪の人たちの優しさなのではないか」と思ったのです。

相手の話をよく聞いていなければ、ボケることもツッコむことも出来ません。ツッコミを入れる人は、ボケている人の話を、「どんなツッコミを期待しているのか」と、最後までしっかり聞いて、絶妙なタイミングでツッコミを入れています。

さらに、誰かがあまり面白くない話をした時には、「しょーもなぁ」と、あえて周りに聞こえるような大きな声で言うことで、それに対して周りが笑ってくれ、何となくその場が明るく治まるという、そんな優しい心配りまでが自然となされているのです。

よく相手の話を聞いて、ノッてあげて、ツッコンであげて、相手に気持ちよく話をさせるというのは、もしかしたら、浪花(なにわ)の商人(あきんど)たちが、長い間かけて育んできた、優しい人付き合いの文化なのではないかと思え、私なりに妙に納得がいきました。

久し振りに会った人に、私だったら、「久し振り！　元気？」と言います。しかし大阪の人は、「おぉ、久し振り！　最近どない？」と聞

いてきます。

「元気？」と聞かれると、「元気よ」で終わってしまいますが、「どない？」と聞かれると、人間というのは反射的に、今、困っていることや悩んでいることを言ってしまうことが多いようです。「どないもこないもありませんわ～」と言いながら、息子がどうとか、娘がどうとか、商売がどうとか、体のどこが痛いとか…。

こういったやりとりを聞き、初めは、「大阪の人って、よくぐちをこぼす人たちだなぁ」と思っていたのですが、最近では、「どない？」と声を掛けることによって、相手の心のモヤモヤを吐き出させてあげているのではないか、そう思うようになってきました。

ひとしきりぐちぐち話をし合っては、大抵、最後は明るく、「ほな、また！」で別れていく。心の中にあるさまざまな思いを聞いてもらって、最後には、それを笑い飛ばして、お互いに心を軽くしてもらって話が終わる。もしかしたら大阪の人は「日本一聞き上手な人たち」なのかもしれません。

私自身これまで行き詰まったり悩んだりした時に、教会の先生に話を聞いてもらってきました。先生は私の話をじっくり聞いて下さり、そのことを神様に一生懸命祈ってくれます。そんな時、「自分の思いを聞いてもらえるところがある」ということがありがたく、それだけで心が助けられることが何度もありました。

『聞き合ひが　まことの話し合ひなりと　しみじみ思ふ　話ききつつ』

『聞き合ひが　まことの話し合ひなりと　しみじみ思ふ　話ききつつ』

これは、金光教の前の教主、金光鑑太郎先生が詠まれたお歌です。

人間にとって、相手に十分に話を聞いてもらうということは、とても大切なことであり、こちらの意見を分かってもらおうとするよりも、まずは十分に相手の話を聞かせてもらうことが大切なのだということを、このお歌を通して改めて思います。

今、私の隣で、「なるほど、なるほど」「ほんまですか、ほんまですか」「分かりました、分かりました」と、電話の相手に、呪文のように同じ相づちを二度繰り返している主人。ただの主人の癖だと思っていましたが、これもまた、「あなたの話、よく聞いてまっせ」というアピールなのだと気が付きました。そこには、「聞き合ひ」をして、「まことの話し合ひ」をしようとする願いが込められているのだと思います。

結婚して六年、ボケやツッコミ、三段オチを求められても、私にはまだまだ出来ませんが、聞き上手の文化の中にある相手を思いやる優しさは、ぜひ見習っていきたいと思っています。

皆さんも今日一日、学校で、会社で、家庭で、誰かにとっての良い聞き手となれますように。

金光教本部　ラジオ放送係
【住所】 719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320
【電話】 0865-42-6453
【FAX】 0865-42-2114
【メール】 w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	（土）	午前５時１０分	山陽放送	（日）	午前６時３５分
東北放送	（日）	５時００分	中国放送	（土）	５時５０分
ニッポン放送	（日）	４時３０分	南海放送	（日）	６時００分
東海ラジオ放送	（金）	５時２５分	RKB毎日放送	（日）	６時５０分
和歌山放送	（日）	６時５０分	宮崎放送	（日）	７時１０分
朝日放送	（水）	４時５０分			

こころで聴くおはなし

http://www.konkokyo.or.jp/radio/